

第一回おぎおん伝承塾で講演をする日比野学芸員



電子版

ぎおん風

小倉祇園太鼓保存振興会会報 電子版第1号

■ 発行 ■

小倉祇園太鼓保存振興会
北九州市小倉北区城内 2-1
平成29年5月1日

城下町小倉を知る

国重文目指して「おぎおん伝承塾」

「小倉の歴史を知ろうと城下町 小倉のあゆみ」と題して、小倉祇園太鼓保存振興会は4月16日、小倉北区古船場町の商工貿易会館で「第1回おぎおん伝承塾」を開いた。保存振興会は祇園太鼓が2019年に400周年を迎えるにあたり、国の重要無形民俗文化財指定を目指している。これからの3年、おぎおん伝承塾を定期的に開催して、市民や保存振興会会員一人ひとりに祇園太鼓への理解愛着を深めてもらうために企画した。

史博物館の日比野利信学芸員が、城下町だった小倉の歴史をわかりやすく解説してくれた。小倉が関門海峡に近く交通の要衝で、江戸時代には譜代大名の小笠原氏が治めており、古くから西国支配のかなめとして重視されていたこと、幕末の小倉口の戦いでは、西曲輪は燃えたが東曲輪は焼損を免れたことを紹介した。明治以降は「軍都」となり、戦争に巻き込まれ、そして復興していく小倉を解説した。日比野学芸員は「小倉の歴史に根ざしたまちや人々の活動に注目して、祇園太鼓を受け継いで行くことの意味を見つめ直してほしい」と締めくくった。

最後に野上育成委員長より、太鼓の正調打ちについて解説があった。本来ドロは「トトン・トトン」と規則的に、かっトトンの左手・右手の音が同じ強さになるのが正調だ。しかし今、右手の音を2拍目または4拍目に強くして調子をとる太鼓がある。さらに、チャンネルもトトンとトトンの合間に間を取るものが正調なのに、トとトンの合間に間を取ってトンの音を強く鳴らすため、調子を合わせるドロが悪い音色になっていると指摘した。野上育成委員長は「いにしえから続く打法を自分たちのいいように変化させている団体がある。正調打ちを理解して、400周年に向けて伝統ある太鼓を伝承してほしい」と訴えた。

【広報委員会・坪井孝一】



ドロの正調打ちを解説する野上育成委員長